



# 若者へのメッセージ 51

紙工芸家(寄席紙切り) 林家 今丸

## 【第二回】旅は道草、世は情け

旅のおもしろ味は、其れ其れの楽しみ方によって印象も多様で、旅人の年齢や感性、趣味嗜好、食へのこだわりなどが関わってくる。旅立ち前の高揚感には、旅先の風土や食べ物、異なる文化への期待感とともに僅かな不安感も混在している。旅は、思い出という「心の財産」をつくる貴重な機会である。

### 旅の始まりは、ひとり旅

私の初めての「ひとり旅」は、高校二年の春休みだった。親のスネを少しばかりかじった千葉・房総半島へのスケッチの旅である。

宿代の二泊分を親に出してもらい、交通費や旅先の食事代、その他諸々は自分持ちだった。

この費用は、父の勤め先、鈴木演芸場が多忙な時期に、手伝いで得たアルバイト料で賄った。

宿の鴨川、御宿では、校則で五分刈りの若者に、意外な表情で迎えられた。

JTBで予約したため、丁寧な応待を受け、予算にしてはかなり良い食事だった。

スケッチの方は、漁港、海辺などどこも同じような景色であったが、岬や沖合の海面から出ている岩が僅かにその地の特徴を表わしていた。帰路は、御宿を立ち、茂原から千葉経由で帰京することにした。

清々しい光に満ちた太平洋を列車から眺めていると、期末試験の結果など忘れてしまう。しかし、この光に満ちた太平洋の光景は、いまだに私の記憶に残っている。



筆者(当時高校二年生、写真左)と筆者の父(写真右)(昭和34年)

余談であるが、時を経て四十年後、「世界一周船の旅」の企画で、メキシコ・アカプルコから米・サンフランシスコに寄港し、ハワイに向う旅をした。船上から光輝く太平洋を眺めていると、十代の頃に、房総半島から太平洋を眺めた記憶が甦ってきた。

### 旅は、合縁奇縁なり

第一回到記述した仏教(禪)、美術の世界に私を導いてくれた片山鉄之助氏。その片山氏から二十代の中頃に、「ヨーロッパ・地中海スケッチ



ウガンダ号寄港地、アルジェリア・オランでのアルジェリア兵による寄航歓迎  
左側が筆者（右側は同乗の高校生たち）

チの旅」の話があり、私は参加を決めた。  
地中海を英国船「ウガンダ号」で周遊し、寄港した各地の街をバスで訪ねながらスケッチを楽しむ、というのんびりした船旅である。

洋画家・石川滋彦先生のもとに、漫画家・秋恰二先生、同じくサトウ・サンペイ氏（以下、サンペイ氏）、鉄工芸家・砂塚徳三氏、九州から参加の美術教師（二名）など多士済々の顔ぶれであった。これらの方々に加え、スケッチ愛好家、旅好きの片山氏、私などの、総勢15名の一行である。旅なれたサンペイ氏と砂塚氏から

旅の楽しみを学んだのは、この船旅だった。両氏ともに、旅を十分に味わうには、ユーモアとアイデアが大切と教わった。

ウガンダ号は、「ヒートルズ」誕生の地・英・リバプールを出港して、荒海で知られるヒスケー湾を通過。ポルトガルのリスボン、スペインのマラガ、マヨルカ島・バルマ、イタリア・ナポリを回り。北アフリカのアルジェリア・オランに寄港し、英・サウザンプトンに帰港する。実に長い道草のような船旅である。さらに、陸路バスでロンドンに向かい、ロンドン泊。空路スイスのローザンヌ、ローマ、パリへと続く行程である。

サンペイ氏は、漫画家だけにユーモアに満ちた人物である。乗船早々に、ウガンダ号のパーサーは、会話をする際に必ず気取った言い方で「Well, now /」と始めるところから「Mr. ウェルナウ」のニックネームを拝領。石川先生は、常にパイプの煙をくゆらせる紳士の風貌で、「ラ・マンチャの男」に登場の「ドン・キホーテ」。活動的な私は、家来の「サンチョ」である。一行の中で、特に長身の若い女性は「ノッポさん」となった。

## ユーモアとアイデアが旅を楽しくする

船旅では、長い航海に飽きないよう、いろいろ

ろなイベントを行う。この航海では、「仮装パーティー」が企画され、Mr. ウェル・ナウの要請で私たちも参加することになった。サンペイ氏の提案で私たちの仮装は「ウガンダ号」に決まり、各自が自分の役を画材で制作して着用すると決まった。船首はノッポさん、煙突は石川先生、前後の船体は中年女性、船尾はサンペイ氏である。船尾の後で尻の方から船のスクリーンを回す役は私である。

「この大役は、サンチョ君以外ない」と魅力的な決め言葉である。パーティー会場では、各自が作ったパーツを付けての行列である。船首、船体、パイプの煙を出しながら煙突が続き、船尾に英国旗を付けたサンペイ氏、後でスクリーンを回しながら私も登場。さらに数羽のカモメ役が船の周囲を飛んでいる演出である。会場は、この仮装に盛大な拍手と大爆笑の渦。船長、乗客代表の審査の結果、栄えある優勝の栄冠を「ウガンダ号」が勝ち得た次第である。

旅を楽しむための「ユーモア」と「アイデア」に加え、一行がそれぞれの持ち味と特技を發揮した結果だった。私はこの船旅の後、幾度もの海外公演と私的な旅を経験してきた。その都度、ユーモアとアイデアを伴った旅を心がけ、楽しむようにしている。